

学習活動の研究活動としての組織化について

校長 中嶋 哲彦

今後の学校教育においては、思考力・判断力・表現力の育成が重視されなければならない、と言われている。知識・技能の習得に偏りすぎた従来の学校教育を改革する必要があるのだ、と。新学習指導要領において「対話的で深い学び」や「探求」が重視されるのはこのためであろう。

私には、こんな経験がある。中2の私は、英語の担当教師から、新出英単語は英和辞典で意味を調べ、単語帳にていねいに記入するよう指導されていた。その日の単元は、Roy、Mary、Tomの三人が街を歩いていて、「あれが僕の学校だ」などと会話を交わす文章だった。そのなかで、Royが、I study English at this school. と発言する行(くだり)があった。授業は、皆で音読したあと、指名された生徒が一文ずつ日本語訳していく形式で進められていた。前日、自宅で予習しながら、この文には当たりたくないと思った。しかし、神も仏も信じない私に加勢してくれる「絶対的存在」はなく、英文を読み上げたあと、私は「訳せません」と言うよりほかになかった。教室中が「エーッ」と叫んだ。

この英文を訳せなかったポイントはふたつある。ひとつは、Englishを英語と訳すべきか、それとも国語と言うべきか、ということだった。英和辞典のEnglishの項には「英語」「イングランド人」などの意味が書かれているから、素直に考えれば「僕は学校で英語を…」と訳すことになる。しかし、私は、学校で母語を学習させる教科はどの国においても「国語」と呼ばれていると思い込んでいたから、Royはイギリスかアメリカの少年という設定を踏まえれば、「僕は学校で国語を…」と訳すべきではないかとの考えに迷い込んでいたのだ。あれこれ調べてみると、Japaneseを「国語」と訳しているものもあって、当時の私には解決しがたい問題を生み出してしまった。

ふたつめは、studyをどう訳したらよいか、だった。studyの項には、動詞の意味として「研究する」「調べる」「学ぶ」「勉強する」などが並んでいた。ここでも、Royが中学生と設定されていることを踏まえれば、「…を勉強している」と訳するのが適切だとは分かるものの、それだけでは英和辞典が列挙する幾つかの意味の中から「勉強する」を選択する決め手にならないと思った。たとえば、20歳代後半の若者が I study English at this university. と言ったとしたら、他の背景が示されないかぎり、「研

究」と「勉強」のどちらを選択すべきか判断できない。

「Royは中学生なんだから、『勉強』に決まっている」、「Englishは『英語』でも『国語』でも良い」というような説明ののち、正解を言わされて、授業は先に進んだ。

studyに限らず、英和辞典には、英単語一つひとつに複数の日本語の意味が書かれている。ただ、その多くは同じような意味の日本語が並んでいるだけだから、英語と日本語が一対多対応になっていても疑問は生じなかった。しかし、「研究」と「勉強」という、当時の私にとっては全く異質な事柄を、studyというひとつの単語で表現してしまう英語は、とても不可解な言語だった。英語を母語とする人々の間でも、話者の素性を仔細に理解しないかぎり正確な意味が伝達できないとすれば、どのようにしてコミュニケーションが成り立っているのか、疑問はますます大きくなった。しかし、私は勤勉な生徒ではなかったから、これらの疑問は解決できないまま数年にわたって放置された。

大学入学後、教養科目の先生が「ぼくは学生の頃からずっと物理学を勉強してきました」と自己紹介されるのを聞いたとき、ふたつめの疑問を説くヒントが得られた。この先生は、学生として勉強した時期と、研究者として研究に従事している時期を、まったく区別することなく「ずっと」とおっしゃった。この先生にとって、勉強と研究は区別すべきものではなく、同一線上の行為だったのだ、と。これを友人に話すと、「いや、謙遜して言ってるんだよ」と返された。しかし、そうだとしても、異質な事柄を一つのこととして扱うことはできないはずだ。もし謙遜だとすれば、謙遜のポイントは「学生の頃からずっと物理学を研究してきました」と表現しなかったことにあるだろう。

とすれば、上記の英文翻訳の問題の本質は、studyの意味を「勉強と訳すべきか、研究と訳すべきか」と悩み、英語を母語とする人々の間での意思伝達の困難性を心配していた自分自身の認識枠組みそのものにあることに気づく。つまり、中2の私は、勉強と研究はいずれも知的活動であると認めつつも、それらをまったく異質なものと捉えていたのだ。勉強とは、あらかじめ正解が用意された問いに正確かつ迅速に答えられるよう、書物が整然と並んだ本棚を頭のなかに作ることであり、何か新しい知や価値を生み出す研究とは月とスッポンほども異質なものと信じていたのである。そして、この確信は

誰に教えられたわけでもなく、小中学校における勉強経験によって強固に形成されたものだった。つまり、上記の英文が訳せなかったのは、自分自身の、そしておそらく日本人の、勉強観・研究観に起因し、またそれらは勉強体験に由来するものなのだろう。

国は、新学習指導要領で「対話的で深い学び」や「探求」を重視する教育課程基準を示した。これは、学校における学習を研究的なものにしていくということなのだろうか。ここで「研究的なもの」というのは、児童生徒の発達段階を越える高度な知的探究活動を言うのではない。文部科学省が「育成すべき資質・能力」というとき、「知識・技能」と「思考力・判断力・表現力」が区別され、「対話的で深い学び」や「探求」は後者について言われている。しかし、「知識・技能」の獲得過程こそ、研究的な知的活動として組織されなければならないのではないか。

子どもの学習活動は、人類の知的活動の成果を自分自身のものとして獲得する活動である。人類の知が発見と発明を通じて獲得されたものであるとすれば、子どもの学習活動はそれらを再発見・再発明することにほかならない。しかし、ここで重要なことは、学習活動は客観的には知的活動の成果を再発見・再発明することであっても、子ども本人にとっては発見・発明にほかならない。意図的・組織的教育である学校教育の過程は、そのようなものとして組織される必要があるだろう。

高柳信一は、英米の研究者の研究成果を踏まえて、大学教育の本質について、次のように述べている。「最も低次の次元で考えても、新世代が大学教育を経て新しい知識を得て社会に送り出されると、それは、しばしば旧世代がすでに社会においてもっている地位や影響力を脅かす可能性をもつことになる。教育は社会の進歩をもたらすが、進歩はその時々支配的な力関係の主役を蹴落とすことによって行われる。教育（なかならず大学におけるそれ）は本質上変革にかかわるものである。教育はしたがって『危険なビジネス』だということになる。」（『学問の自由』岩波書店、1983年）

ここで、高柳は、とくに大学における教育が研究的なものであることを踏まえて、「教育（なかならず大学におけるそれ）」と語り、小中高校の教育が子どもの創造的な知的活動を促すものとして展開されるようになれば、高柳の指摘はそのまま小中高校の教育にも当てはまる。

高柳が「危険なビジネス」と言うのは、それを否定するためではない。高柳は続けて、次のように述べている。「より高次の次元で考えるならば、『知識を保存し、伝達し及び増進するという目的の本質的要素は、異論なく一般に容認されている社会通念をたえず疑い、これにたえず挑戦するところにある』とされる。学問の自由は、本質上当然に、その時々社会の価値秩序に対する

挑戦を触発するのである。」

「対話的で深い学び」や「探求」を重視し、学習活動を創造的・研究的なものとして組織すると言うのであれば、子どもにとっての学問の自由、すなわち「研究的学習の自由」とはどういうことを意味するかを、研究課題として取り上げることが必要になるのではないだろうか。

なお、中2のときのひとつめの疑問（Englishを英語と訳すべきか、それとも国語と言うべきか）にも言及しておこう。現在、国語と認識している言語は、明治以降、人為的に形成され、各地域に存在した自然言語（これもまた人為的に作られたものかもしれないが）を駆逐しつつ、近代国家の言語として使用が強制されたものである。母語（mother tongue）の剥奪と、祖国（father's land）の言語＝国語の強制である。このプロセスは今日では、方言を話す人のコンプレックスとして、まったく転倒した形で姿を現している。あのときEnglishを国語と訳すべきではないかと考えた事実は、Japaneseを国語と同一視して疑わない国家主義的言語観が中2の子どもにすでに刷り込まれていたことを意味する。